

新年のご挨拶

各教室の皆様、そして「雲の手通信」の読者の皆様、明けましておめでとうございます。本年も相変わらずよろしく願いいたします。

私事ですが、今年の年央にはいよいよ満80歳を迎えることとなります。日本人の男性の平均寿命は2012年段階で79.94歳ということですから、何とかそこまでは到達したということ、あるいはもう残りはないということなのでしょうが、それはそれとして、今年も毎日毎日を前向きに楽しく生きて行こうと思っております。

そして皆様と楊名時健康太極拳をともに楽しみ、交流し、研鑽することが出来ればと願っております。

【右写真；葛城山（伊豆長岡）山頂から望む富士山】



1

トピックス 太極拳経勉強会進行中

昨年9月に終わった「太極拳まるごと勉強会」の追加講座『太極拳譜（経）勉強会』は29名の方の参加を得て11月から始まり、12月までに2回を消化しました。1月、2月の全4回で終了する予定です。

第2期「太極拳まるごと勉強会」へどうぞ

昨年に引き続いて本年4月から「第2期・太極拳まるごと勉強会」を開催します。前回実施内容を更に充実補強し、下記のような項目で、全体で16回を予定しております。前は夜の部を設けましたが、今回は午前の部のみとしました。また前は月1回でしたが、今回は月2回のペースで行います。

部屋の都合もあり、定員は30名とさせていただきます。会場は船堀タワーホール(都営地下鉄船堀駅前)です。私の教室の会員に限らず、どなたでもご参加いただけますので、このようなテーマにご興味のある方はどうぞご参加ください。闊達に意見を交わし、ともに勉強する会にしたいと思います。

お問い合わせ、お申し込みはメール(t_chaki@mte.biglobe.ne.jp)または電話・ファックス(03-3877-6035茶木自宅)でお願いいたします。

「第2期・太極拳まるごと勉強会」テーマと日程表

回	年	月日	部	テーマ		
1	2014	4月9日	序論～1	太極拳この深遠なるもの		
2		4月23日	序論～2	「気」と「気功」を考察する		
3		5月14日	第1部	太極拳とはなにか？	第1章	太極拳の源流をたどる
					第2章	“太極拳”の誕生
4		5月28日		同	第3章	太極拳譜の謎
					第4章	だれがいつ広めたか
5		6月11日		同	第5章	各派の違いを検証する
					第6章	新中国における展開
					第7章	楊式太極拳を総括する
6		6月25日		太極拳経を読み解く	第1回	易経・太極拳釈名
7		7月9日			第2回	十三勢歌

8	7月23日			第3回	太極拳経
9	8月13日		太極拳余話	第1話	楊露禪と川島芳子
				第2話	馬賊・道教・武当拳
10	8月27日	第2部	気と気功	第1章	「気」を科学する
11	9月10日		同	第2章	「気功」を整理整頓すると？
12	9月24日		同	第3章	道教について
13	10月8日		同	第4章	余話「催眠術・忍者・白隠」
14	10月22日	第3部	体の仕組み	第1章	関節を勉強する
15	11月12日			第2章	経絡を勉強する
16	11月26日	第4部	楊名時太極拳についての考察		

(都合によりテーマの変更、日程の繰り延べがあるかもしれませんが、ご御了解ください。)

閑人閑話 小説『永遠のゼロ』に泣く

百田尚樹ひゃくたなおきの『永遠のゼロ』を衝撃と感動をもって読破しました。恥ずかしながら、地下鉄やバスの中で涙を抑えきれずに夢中で読みました。小説を読んで泣いたのは久しぶりです。

ゼロとは名機「ゼロ戦」、つまり「ゼロ式艦上戦闘機」のことです。**【写真下】**小説の主人公は宮部久蔵、終戦間際に特攻隊で散ったパイロットです。

フリーライターフリーライターの姉と、司法試験に失敗して目下ニート状態の弟が、三歳の時に父を亡くしている母のたつての頼みで、母の本当の父、すなわち二人にとっては全く知らなかった“最初のおじいさん”である宮部久蔵のことを調べてゆくというのがこの小説の大筋です。宮部久蔵の妻松乃は久蔵の死後再婚していますので、二人は今のおじいさんと区別してそう呼んだわけです。



二人は協力して、厚生労働省や戦友会を介して、“最初のおじいさん” 宮部久蔵の戦友や部下などの生き残り 10 人を探し出して、訪ねて行き、当時のことを聞き出してゆきますが、その過程で宮部久蔵が極めて優秀なゼロ戦の操縦士であったことと、同時に、時には卑怯者、臆病者と言われるほど“生きて妻子のもとへ戻る”ことに執着していたことが分かってきます。

映画『風立ちぬ』でも描かれていたように、「ゼロ戦」は昭和 15 年に作られた、(この年は紀元 2600 年でしたのでゼロ式なのです。) 航続距離、速度、回転性能、どれをとっても世界最優秀の戦闘機でした。

事実、第 2 次世界大戦開戦の初期には英米の代表機種であったスピットファイアーやグラマンも一対一の空中戦では全く歯が立たなかったといわれています。

小説はこの 10 人の口を借りて当時の太平洋海域で行われた海戦と空中戦のありさまと戦況の変化を描いていきますが、ゼロ戦をしのぐ性能の新型機種が投入されたりして、次第に英米の物量が勝るようになり、一方日本軍部の戦略、戦術の齟齬も重なり、次第に追い詰められてゆく過程が、またその中で、兵士たちが消耗品として扱われていくさまが生々しく描かれています。

主人公、宮部久蔵も、また最後には特攻隊員として「ゼロ戦」に乗って敵空母「タイコンデロガ」に体当たりして戦死するのですが、なんと終戦のわずか数日前のことでした。エピローグではその空母の砲手

の口を借りて、その最後の壮絶な様子が明かされるのですが、…泣かされました。

この小説の優れているところはその構成がきわめて緻密に、いくつもの伏線を張りながら進行していくことです。最後の部分になって、えーっと驚くような事実はいくつも遭遇します。そうだったのか、これはたんに戦争を描いた小説ではなく（もちろん戦争を賛美している小説ではありません）、極限の愛の物語であったのだと思い知らされます。彼自身は生きて帰ることはできませんでしたが、彼の執念が、彼の愛の強さが、残された妻とひとり娘の命運をしっかりと導き、護ってくれたのです。それも思いもよらない形で。奇跡のような出会いで。

ということで、たっぷり何度も泣かされた小説でした。お勧めします。小説『永遠のゼロ』！映画も公開中です。

さこうべん 左顧右眄

(79)【第16話 楊名時師家の名語録をひもとく】

第9話 ぶーぼーまん じーぼーざん 不怕慢 只怕站

(1997年5月 「太極」第104号)

『「不怕慢、只怕站。」 この言葉を、初めて中国語を選択し、勉強を始める方に、必ずといってよいほど申し上げた。もちろん太極拳を学び始める方にも——。

「不怕」は、おそれない、こわくないの意。「只怕」は、～だけこわい。「站」はたちどまるという意味である。

「ゆっくりやるのはかまわないが、立ち止まってはいけない」という格言である。

中国語で言えば、資質も発音にも恵まれた方はいっぱいいるが、必ずしも恵まれなくても、長く、少しづつでも、ゆっくり進むのがいい。いつまでも続けて、生涯貫けば、中国語も好き、中国の文も好き、中国も好きになる。

私は、まあ変わった先生だったかもしれないが、結構生徒の間では、この最初の言葉に感銘を受けたという生徒もいた。

太極拳でも同じでは無いだろうか。

この言葉を肝に銘じて学んでゆくなれば、繰り返し学んでいるうちに、しまいには止めようと思っても止められなくなってしまい、みなさんの生涯の為になる宝物となるにちがいない。

そういう意味では、この言葉は、出発点であり、原点であり、止まる境のない、奥の深い、極意にも通じるのではないかと思っている。

途中で、なかなか覚えられないからとか、望むとおりにならないからといって、やめてしまっはいけない。

あせらずゆっくり進むのは結構だが、途中で止めてしまっは今までの努力が水泡に帰してしまう。繰り返し繰り返し、飽きずに学び続けることがたいせつである。いったんやろうと肝に銘じて始めたなら、ゆっくりでもコツコツやり抜くこと。これが頭の良し悪しに関係なく、成功する原動力である。

中国語や太極拳に限らず、この名言は、すべてのお稽古事、習い事に通ずる教えと言ってよい。あるいは仕事に通用するたいせつな教えである。

これまでも、繰り返し申し上げてきたが、ここでまた、初心に戻って、この言葉を記しておきたい。初心貫徹、貫き通すことである。……』

この「不怕慢、只怕站。」についてはこの雲の手通信のはじめのころ、2004年5月発行の第3号の「用語解説」欄でも取り上げておりますが、まさに名格言であると思い、ここで再度ご紹介させていただきました。私自身とても好きな言葉のひとつです。

先生の文章の最初のところを少し補足しますと、先生は若いころ、中国語の教師をいろいろなところで

なされていました、NHKの講座の講師もされました。最終的には大東文化大学で教鞭を長くとられ、教授、名誉教授まで勤められた経歴があります。楊名時先生の自伝書ともいえる「太極—この道を行く—」にそのあたりのご様子はある書かれていますのですが、当時の中国語の生徒さんであった瀬戸口律子さん(現大東文化大学中国語科教授)の感想が先生によって紹介されていますので、ちょっと引用してみます。

“…正しい答えが返ってくると、(楊名時)先生は満面の笑顔から「很好」という賛辞が発せられるのだ。間違った答えに対しても同じ笑顔から「不要急、慢慢来」と必ず励ましの言葉が戻ってくる。私はこれですっかりうれしくなり…”

どうでしょうか、いかにも先生のお人柄がしのばれる一文ですね。先生は「流水不争先」という言葉もたいへん好きでしたが、この「不要急、慢慢来」も素晴らしいお言葉ですね。

旅をうたい拳を詠む

富士を見る旅

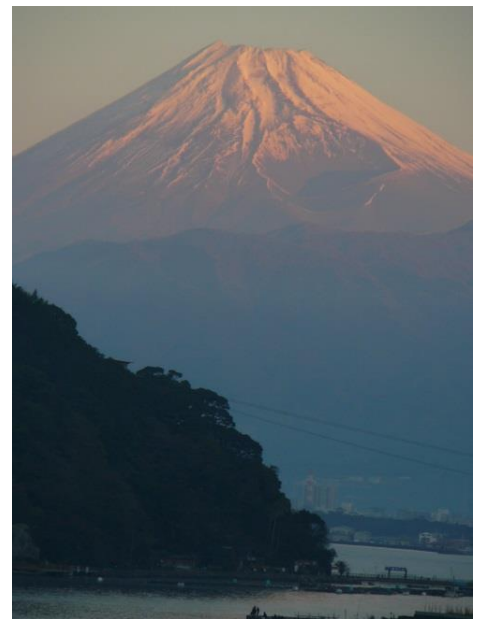
12月の初めに友人夫婦4組8人で西伊豆へ1泊2日の小旅行に行きました。伊豆長岡では願成就院で阿弥陀如来坐像(運慶作)などの国宝仏を拝み、ロープウェイで葛城山に登って、雄大な富士山を眺めました。泊ったのは伊豆三津浜の某旅館。料理も美味しく、部屋からも風呂からも富士山が眺められたのが最高でした。



【写真右；宿から見る朝焼け富士】

二日目は沼津に出て旧御用邸のお庭を散策、さらに原まで足を延ばして松蔭寺(白隠禅師の墓所)を訪れ、柿田川湧水に立ち寄って帰りました。二日間とも快晴で、行く先々で世界遺産となった富士の雄姿を鑑賞できた旅でした。

松蔭寺は地元生まれの白隠が得度した、また、のちに住職として生涯務めた臨済宗の寺です。臨済宗中興の祖として、また独特の禅画で知られる白隠ですが、道教由来の「軟酥の法」や「臥禅」を紹介した『夜船閑話』の著者としても有名です。



山も海も人の暮らしもとこしえにやすかれと祈る冬晴れの朝
頼朝の武運祈りて彫らせしとふ阿弥陀如来の面差し優し
ゴンドラの登るにつれて顔を出しせり上がりくる白妙の富士
思わぬに三津の浜より海越えて南アの雪嶺並び立つ見ゆ
料理良し湯も良しされど部屋からの

富士の眺めに勝るものなし

八十に近き男が四人して酔って歌うは“ぼくら高校三年生”
朝風の駿河の海に惜しげなく裾を曳きたる冠雪の富士
白隠の墓域ぐるりと囲むごと弟子雲水の卵塔並ぶ

【写真上；願成就院本堂 下；阿弥陀如来坐像】